

人を、木を、育てる情報誌

緑の地球109

Vol.24-3

特別寄稿

住民林業が開く未来

ミャンマー中央乾燥地 JIFPRO プロジェクト視察から
滑志田 隆

植林 NGO 奮闘記

野生生物を調査研究する会

「現地のニーズを掘り起し、現地リソースを活用し、現実にあった活動を！」

みどりの教科書

適地適木：植林樹種特性一覧表

NGO 虎の巻

補助金・助成金申請のコツ



コミュニティフォレストリー

住民林業が開く未来

ミャンマー中央乾燥地 JIFPRO プロジェクト視察から

滑志田 隆 (毎日新聞社終身名誉職員、林政ジャーナリストの会所属)

(写真：岩佐 正行 氏)

ミャンマーの森林減少を食い止める

民主化への移行とともに新たな国作りが進むミャンマー。人口爆発と経済成長、その一方で森林減少に歯止めがかからない。砂漠化を防止し、農村の生産力を向上させるため、森林の造成が大きな課題となる中、JIFPROが取り組む住民林業（コミュニティフォレストリー）方式の植林に期待が高まっている。緑の募金事業からも支援を受け、ミャンマー中央乾燥地を緑化する試みが着実な成果を上げ始めた。

優良チーク材の産出国も、森林減少に悩む

日本の1.8倍の国土面積（6,766万ha）。ミャンマーは旧名称のビルマで広く知られている。北緯20度以南は熱帯雨林気候。同以北は温帯夏雨気候。人口は4,872万人（2012年）。国内は6地方6管区に分かれて統治されている。

国土の48%が森林（FRA2010より）。良質なチーク材の生産国で知られてきた。英国の植民地時代からチーク林を保護する森林法が施行されてきたが、1990年か

ら2010年までの20年間で消失した森林は745万ha。年平均減少率0.95%の数字だけ見れば、100年間で全森林を消滅させる勢いである。

熱帯林を減少させる圧力としては、商品作物や輸出用農産物の生産拡大の影響が重視されるが、農村部ではエネルギー源のほとんどを木質バイオマスに頼っていることも見逃せない要因だ。ミャンマー政府の環境保全・林業省はマンダレー管区など中央乾燥地での緑化拡大と、水源地帯の森林の復旧に特に力を入れている。



取材メモ

【チャウカン・プロジェクト】

プロジェクト期間：2013年4月—2016年3月（現在進行中）

植栽面積：90+15ha（15haは国土緑化推進機構の緑の募金にて）

樹種：*Eucalyptus camaldulensis*（ユーカリ）、*Acacia catechu*（アカシア）、*Tectona hamiltoniana*（ビルマチーク）、*Albizia lebbek*（ビルマネムノキ）

参加村：チャウカン村、ジオ村、ユアターエ村

植栽密度：3.65 × 3.65m（750本/ha）



Myanmar



(写真：滑志田 隆氏)

緑の募金による給水車の贈呈式（左：ニャン・ウー森林管理事務所のネイミョー・ウィン氏、右：国土緑化推進機構の青木氏）

住民総出の植林セミナー —祝福される新給水車

ミャンマー中央乾燥地の土の色はギラつく太陽に似る。旅人たちに強烈な印象を与える広大な裸地。ココヤシの疎林と灌木が僅かな緑と日陰を作り出す。

標高100m。イラワジ川の河岸段丘上に孤立したビルマネムノキの根元で、40センチほどの大トカゲが猛暑に耐えるかのように動かなかった。

乾季と雨季が交互に訪れるが、農民たちは常に水不足とのたたかいを強いられる日々だ。住民自らが森林を造成する国民運動ともいえるコミュニティフォレストも、自然条件にかなった苗木獲得と、初期成長を確実にする水供給の確保から始まる。植林の大切さを訴えるだけでなく、水まきなどの継続した努力を促し、住民共有の資産であることを理解してもらうこ



植林セミナーに詰めかけた地域住民



(写真：滑志田 隆氏)

植林セミナーでの植樹の様子（チャウカン村近く）



チャウカンプロジェクト対象地の見学
見上げている木は *Acacia catechu*



植林セレモニーにて記念植樹

とが、造林の技術指導のポイントとなる。

仏塔遺跡群で国際的に知られるバガン市から南東にバスで2時間。JIFPROの事業地のニャンウー地区チャウカン村と他2村の住民総出の植林セレモニーが行われていた。年間降雨量600mm前後。ラテライトを含む土壌は貧栄養。「まずは水の確保」と訴える住民たちの要望に応え、緑の募金を活用した3トン給水車が贈呈された。約300人の住民それぞれが一本ずつの苗木を持ち、土の上になぞくまるようにして村長の合図を待っている。足元にはすでに穴が掘られている。ラップと太鼓によるリズムに合わせて若い男性の舞

踊が続く。やがて、一斉に植林作業が始まった。

少ない雨を有効に利用するための技術として、縦、横、深さとも約70cm（2フィート）の植穴を掘り、底部を20cmほど盛り土し、その上に苗木を植え込む。1haあたり約750本を目標として住民総掛かりの作業が、炎天下で繰り広げられた。約30km離れたイラワジ川から水を運ぶピカピカの給水車に、住民たちの熱い視線が注がれた。

住民の共同利用林として育成

「苗木の周囲に集水堤を設けることが特徴的な工夫であり、乾燥

に強い現地樹種をよく選んだうえ低密度で植栽する。育林の成否を握る最大の要素は乾季に十分な水を供給できるかどうかだ」と植林指導者は説明した。

生育した森林は地域住民の共同利用林となることが約束されている。同コミュニティフォレストを造成する住民組織はチャウカン村（399世帯1,900人）、ジオ村（193世帯997人）、ユアタエイ村（85世帯398人）であり、計677世帯3,295人が森林を共有することになる。

生育に成功すれば、家庭燃料としての木質燃料、家畜飼料、農業用資材、家屋用の材木資材を手に入れることができる。一帯は現在

のところ耕作不適地だが、造成林が防風、防砂の役割を果たして半農地に生まれ変わるだろう。

ITTO（2011）によると、ミャンマーの森林はすべてが国有というものの、保護対象林（Reserved forest）は15%。あとの「Public forest」は指定された樹種（チーク等）の伐採を除いて地域住民の利用管理に任されている。政府は保護対象林を30%まで増大させたいと考えている。また、中央乾燥地では砂漠化防止の観点から73万haを天然更新によって森林回復する上に、1997年から2030年までに32万haを植林する計画だ。この計画の中にコミュニティフォレストの理念が位置づけられており、2030年には50万ha（天然林と人工林の合計）が地域管理に移行される。

ミャンマーにおけるJIFPRO「熱帯林造成基金プロジェクト」は1997年からスタートし、植栽面積の実績は8カ所計1,560haに上る（2014年3月）。「サデ水源の森」の成功がよく知られるが、今年（2014年）の猛暑では池は涸れた。水源林は育っている。乾燥地を緑化する試みは、過酷な自然条件とのたたかひの繰り返しでもあるが、着実に緑は増え、住民の日常生活は向上している。

コミュニティフォレストの活動が、同国の森林減少をどこまで抑止できるのかは、民主化への歩みとも深く関連するだろう。その理念はまぎれもなく住民自治の伝統の復元と、これに支えられた民主的な資源利用の道筋の中にある。



薪を集める農家（集められた薪は燃材として利用される）



森林管理事務所のネイミョー・ウィン氏から
JIFPRO プロジェクトについての説明



植林地ツアー一行（カバニプロジェクト地にて）



植林 NGO 奮闘記

特定非営利活動法人

野生生物を調査研究する会 さん

「現地のニーズを掘り起し、現地リソースを活用し、現実にあった活動を！」

野生生物を調査研究する会とトメアスでの活動

野生生物を調査研究する会（以下、当会）は、「人・暮らし・自然」をテーマに、野生生物の調査に加え、暮らしを通じた人と自然のつながりを含む環境保全を意識し「生きている川シリーズ」として流域を単位とした環境読本を作成し、里山保全活動や環境教育・

啓発活動などを実施しています。

当会は、ブラジル連邦共和国パラ州トメアス市における活動を2003年に開始し、トメアス総合農業協同組合（Cooperativa Agrícola Mista de Tomé-Açu。以下、CAMTA）及びトメアス文化農業振興協会（Associação Cultural e Fomento Agrícola de Tomé-Açu。以下、ACTA）を現地カウンターパートとして、アグロ

フォレストリーの推進を目的に、コミュニティ苗畑の造成とアグロフォレストリー植林活動、及び、アグロフォレストリーワークショップを実施しています。

本活動の目的は、現地の日系農家が独自に開発し実践してきたアグロフォレストリーを現地の小農家にも普及することで、天然林の新規伐採圧力を軽減させると共に、開墾によって荒廃地化しつつ



団体概要

設立年：1992年

代表者：黒田 明彦

活動国：兵庫県・ブラジル

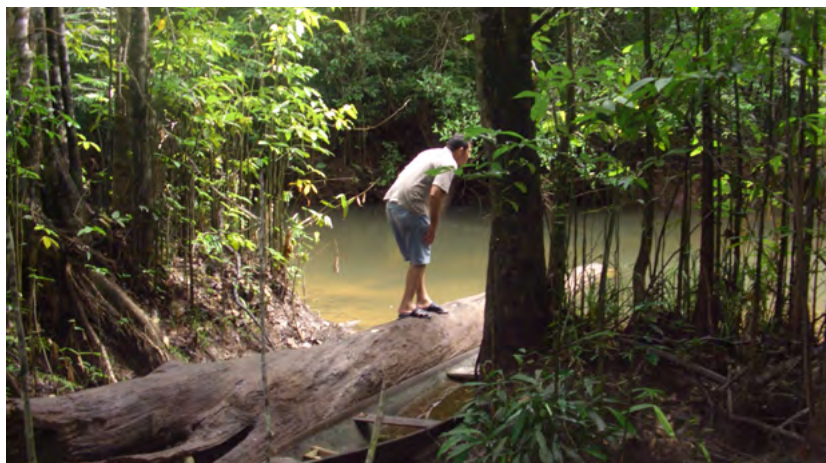
主な活動分野：里地里山保全事業、熱帯林保全事業

連絡先：兵庫県神戸市北区東有野台4丁目15-10

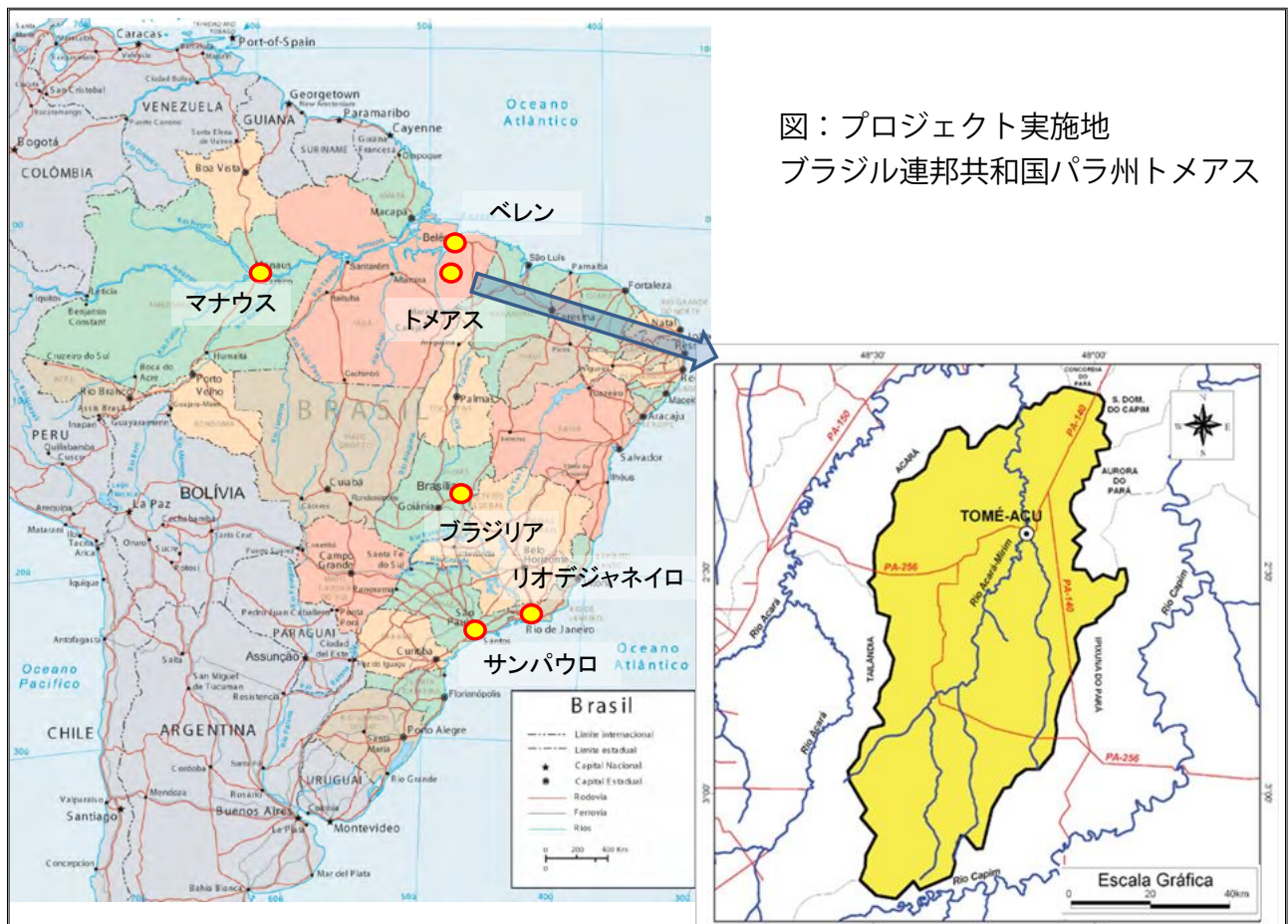
TEL/FAX：078-981-2821

E-mail：imakiyu@yahoo.co.jp

URL：http://www.wildlife.or.jp/



トメアスに残された原生林（小農家の営農が安定化すればこれらの森林も守られる）



図：プロジェクト実施地
ブラジル連邦共和国パラ州トメアス

ある土地に植林し天然林と人里の間のバッファゾーン(緩衝地帯)を形成して、人と自然が調和する環境を保全していくことです。

当会がトメアスで活動することになったきっかけは、アマゾンへの視察旅行でトメアスを訪問したことでした。日系農家によるアグロフォレストリーと点在して残る原生林、それとは対照的な森林の伐採現場を見て、現地のリソースを活用した活動を実施したいと思いました。そこで、現地(ACTA)と協議を重ね、当会の強みを活かした環境教育をテーマに、環境インストラクター養成講座を実施しました。2年半の活動により、18名の環境インストラクターを養成しましたが、環境教育は効果

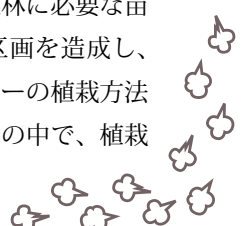
が現れるまでに時間がかかることもあり、より直接的な活動を望む声があがり、現在のアグロフォレストリー植林、コミュニティ苗畑造成活動を開始することとなりました。

アグロフォレストリー普及への取組

トメアスのアグロフォレストリーは、主要作物であったコショウがモノカルチャーによって壊滅的な被害を受けたことの反省に立ち、日系農家が独自に開発し、拡大させてきていました。しかし、周辺の非日系農家では、依然としてキャッサバ等の短期作物のモノカルチャーが主体で、安定的な営農ができず土地を木材業者や大規

模牧場主に売却するため、それが天然林への伐採圧力の一つの要因となっていました。そこで、アグロフォレストリーを実践している農家らが組合員となっているCAMTAと共に、周辺農家へのアグロフォレストリー普及を進めて行くことにしました。

初年はアグロフォレストリー植林を実施しました。植林そのものもそうですが、アグロフォレストリーの技術普及も重要な要素です。そこで、小農家が組織する生産者協会が所有する共有地での実施と協会の会員による共同作業への参加を条件に、植林に必要な苗を配布してモデル区画を造成し、アグロフォレストリーの植栽方法を指導しました。その中で、植栽





アグロフォレストリーの技術指導

後の継続的な技術指導の要望も強く、この手法では一過性の活動に留まってしまうため、コミュニティ（生産者協会）で管理する苗畑の造成プログラムを現地カウンターパートのCAMTAと共に考案しました。

コミュニティ苗畑造成プログラムは、小農家の協会で会員たちが共同管理する苗畑を造成し、それぞれの土地でアグロフォレストリーを実施していくというものです。苗畑の造成に際しては、コミュニティの人々を集めて、環境保全啓発のワークショップを実施しました。緑の募金によって日本から届けられた支援であることを初め、本活動の趣旨について理解してもらいました。この事業では、技術指導や苗畑の資材を提供する代わりに、共同作業によって

苗畑の維持・運営管理を自立的、継続的に実施していくことを条件としています。これらの条件への同意を確認できて初めて、苗畑を設置します。技術指導のため定期的に各苗畑を訪問し、実際に自分たちで作業を行うなかで出てくるコミュニティの人々による疑問等に答えつつ、自立に向けた支援をしています。

小農家の情報共有

このコミュニティ苗畑の活動が拡大させていく中で、産学官のネットワーク、また、小農家コミュニティ間の情報交換・ネットワークが重要であると考え、アグロフォレストリーワークショップを開催しました。ワークショップの中では、コミュニティ苗畑造成を実際に経験した人々の体験談

を発表する場を設けたところ、大きな反響がありました。実体験に基づく生の声であったということ以上に、参加者の多くが小農家の人たちであり、同じような境遇にある人の発表であるため状況がよくわかり、また、素朴な表現による発表が大変わかりやすかったと大好評となりました。例えば、小農家の方々は肥料を購入する資金がないために、ほとんど無施肥で農業をしており、また、酸性土壌を石灰で中和するということがない、或いは、知らない人も多く、支援によって石灰散布と施肥をしたことで収穫量が大幅に増えたこと、それによって、冷蔵庫やバイクが買えた、子供を大学に行かせる資金が出来た等の具体的な話題を交えて、生活水準が向上したという話は特に参加者の



CAMTA のジュース工場
(アグロフォレストリーの産物を加工・出荷)



アマゾン自然学校水質検査研修



ワークショップでの小農家たちの発表



苗畑整備にあたり地元説明

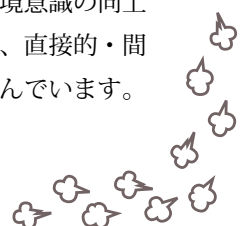
関心を引いていました。また、トメアスのアグロフォレストリーはスイカやトウモロコシ、マメ類といった短期作物からパッションフルーツ、コショウ等の中期作物、カカオ等の長期作物を組合わせて植栽していき、植え付けた初年度から収穫・収入が得られることや収穫季節が異なる作物を混ぜることで、年間を通して収穫・収入が得られるような工夫がされており、収入試算例等も紹介し、そして、実際にどのような収穫ができたかという経験を小農家が発表するという具合に、難しい話ばかりではなく、「自分たちでもできそうだ」という気持ちになれるのが

大きな特徴だと思います。本ワークショップは、当初の三年間は予算を事前に確保して実施していましたが、四年目以降は現地での協賛も得ることができ、毎年開催し、今年は第5回目の会を催すことができました。

発表の場と合わせて、アグロフォレストリー実践地の視察もプログラムに加えていますが、この時、小農家の実践するフィールドと比較的大規模な農家が実践するフィールドを合わせて訪問することで、短期的な目標と中長期的な目標を持ってもらえるように工夫しています。よく、先進や優良事例として、大規模農家の視察ばかり

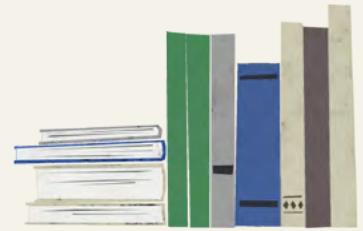
りをすることがありますが、小農家にとっては、現実とかけ離れすぎていることにより、挑戦する気力が湧かないまま終わってしまうことになりかねず、そのために同じような小農家が実践している場所を見てもらうようにしています。

そして、良い意味での競争意識も働き、これらの活動の結果、今では日系農家を凌ぐような篤農家が現れるようになりました。そして、従来のモノカルチャー農業からの脱却により、環境意識の向上にもつながっており、直接的・間接的に環境保全が進んでいます。



みどりの教科書

Lesson
02



適地適木：植林樹種特性一覧表

公益財団法人国際緑化推進センター 主任研究員 仲摩 栄一郎

はじめに

皆さんは“適地適木”という言葉を知っていますか？「植林する際には、植林に適した土地を選び、そこに適した木を植えなさい」という意味の熟語です。

国際緑化推進センターでは、「熱帯林造成基金事業」として、企業・団体や市民の皆様からの寄附金を基に、インドネシア、ベトナム、ミャンマー等の東南アジアの国で植林プロジェクトを実施しています。1992年のセンター設立からの累計植林面積は約8千ヘクタールに達します(2014年3月時点)。これまでに私はいくつかの熱帯林造成基金事業を担当してきました。その際に、最も気をつけなければいけない、この“適地適木”について述べます。

植林適地の判断

通常、植林プロジェクトを立ち上げる際には、現地のカウンターパートが森林でない場所、つまり木の生えていない場所を植林候補地として提案してきます。しかし、「木が生えていない。さあ植えよう!」では失敗する可能性があります。

植える前に、その場所が植林に適している適地かどうかを判断しなければなりません。

まず、その土地の履歴や特徴を把握し、木が生えていない原因を把握する必要があります。例えば砂漠や、森林限界を超えた高山帯、または湿地帯のように、そもそもその土地の気候条件や土壌条件が樹木の生育に適していない場合があります。そのような場所では余程特別な方法を導入しない限り、植えても枯れてしまうので植林対象地とするべきではありません。

通常の植林プロジェクトの対象地としては、以前は森林だったが何らかの原因で森林が消失してしまった場所が適しています。そのような土地の気候・土壌条件では、樹木の生育が可能です。そこで、まず対象地の履歴を調べます。森林消失の原因(自然災害、人為的な伐採、放牧、山火事または鉱山開発等)を把握します。そしてそれらが再発する可能性があるかどうかを事前に分析し、再発リスクが高い場合には、何らかの対処方法(監視体制の強化や防護柵の設置等)を植林計画に盛り込まなければなりません。

気候条件の調査

植林適地かどうかを調べるには、対象地の気候条件も把握しなければなりません。気候条件はまず、霜の有無や月別の最高・最低気温に基づき、熱帯、亜熱帯、温帯、亜寒帯、寒帯の大気候帯に区分されます¹⁾。次にそれに湿潤・乾燥を加味した気候地域に区分されます。そして気温と降水量に基づく乾燥月の数、降水量と蒸散量の関係、標高や植生等の指標によりさらに詳細な生態ゾーンに分かれます。それぞれの生態ゾーンに適した樹種が存在します。ちなみに、私が青年海外協力隊に参加していた20



東ヌサテンガラ州の適木
(乾燥耐性のある在来樹種
Nitas (*Sterculia foetida* L.))



南カリマンタン州の植林適地（山火事により森林が衰退）

年前の苦い経験として、熱帯の樹木であるマンゴーを、亜熱帯地域において、平地より少し標高の高いところに植えたところ、霜が降りて枯れてしまったことがあります。

土壌条件の調査

対象地の土壌条件も把握しなければなりません。まず、現地の概況把握として、対象地の地形（微地形）、土地の乾燥・湿潤状態および保水性・排水性ととも、草本・木本を含む現存植生の有無を確認します。そして、土壌環境を把握するために現地で土壌調査を行います。土壌調査の方法は一般的に下記の通りです^{2), 3)}。

①土壌断面調査

少なくとも深さ1 m（可能なら2 m）ほどの深さの穴を掘り、垂直の土壌断面を作成します。作成した土壌断面は、腐植に富むA層、その下のB層や更に下部のC層等に区分しその構成とそれぞれの厚さを調べます。一般にA層が厚い土壌ほど肥沃で、A層とB層の深さの合計が有効土層深となります。下層に水のしみ出しや地下水位面が観察される場合は、その深さも記録します。

【参考資料】

1) Table 4.1. Climate domains, climate regions and ecological zones. IPCC 2006, 2006 IPCC Guidelines for National Greenhouse Gas Inventories, Prepared by the National Greenhouse Gas Inventories Programme, Eggleston H.S., et al. (eds). Published: IGES, Japan.

2) 森林立地調査法 - 森の環境を測る（改訂版）。森林立地調査法編集委員会編。監修：有光一登ら。2010年。博友社。

3) 森林土壌の調べ方とその性質（改訂版）。森林土壌研究会編。1993年。林野弘済会。

②各土層の観察

区分した各土層について、土色、斑紋の有無とその特徴（過湿や排水不良等の判定に役だつ）、土性（砂土・砂質壤土、壤土・微砂質壤土、埴質壤土、埴土、石礫土）、礫含量、硬さ、土壌構造の種類と発達程度、孔隙量、植物根の分布状態等の観察を行い記録します。

③土壌物理性・化学性の調査

更に詳細な解析が必要な場合には実験室に土壌サンプルを持ち帰り、土壌物理性に関しては非攪乱土壌試料を採取し、孔隙組成、透水性、容積重（単位堆積に占める土壌の重さ）などを、また土壌化学性については、pH、電気伝導度（EC）、有機炭素（乾燥地土壌の場合は無機炭素も）、全窒素、有効態リン、塩基交換容量（CEC）、交換性塩基類、交換性アルミニウム、塩基飽和度、等を調べます。

適木の選定

樹木は、それぞれの種ごとに特性を持っており樹種特性とよばれます。植林対象地の気候—土壌条件と植林樹種の特性を勘案して、その土地に適した樹種（適木）を選定しなければなりません。樹種

の特性としては、暑さ・寒さに耐性のある樹種、強光・被陰条件に耐性のある樹種、土壌中の乾燥・過湿条件に耐性のある樹種、酸性・アルカリ性に耐性のある樹種、貧栄養・過剰栄養条件に耐性のある樹種等があります。これまでの経験から、植林対象地内に1本でも現存している樹種は、その土地の気候—土壌条件に適していることが実証されているので、有力な植林候補樹種となります。また、熱帯の荒廃地において土壌中の窒素養分が不足する場所では、共生する根粒菌を通して空気中から窒素を固定するマメ科樹種が相対的に良い成長を示すことが多いです。

ちなみにこれも20年前の青年海外協力隊当時の話ですが、土壌診断をしなかったが故に、植林対象地が、雨期には水浸し、乾期には乾燥してひび割れを起こす重粘土質土壌であることを見抜けず、植えた木がほとんど枯れてしまった苦い経験があります。

植林樹種特性一覧表

このたび、植林対象地に適した植栽樹種を選定する際のガイドとして、「インドネシアにおける植林樹種特性一覧表（案）」を作成しました。主にインドネシア国を対象として、その土地の気候—土壌条件や光条件等を指標として、それに適した樹種を選択することが出来ます。この一覧表は無料で配布しております。必要な方は当センターまでご連絡下さい。皆様にご活用いただければ幸いです。

お問い合わせ：03-5689-3450
（担当：仲摩）



No. 002

補助金・助成金 申請のコツ

NGO 活動にちょこっと役立つ情報を提供する「NGO 虎の巻」コーナー。第2回目は、補助金・助成金申請のコツについてちょこっと解説します。

国際緑化推進センターでは、「林業 NGO 等活動支援事業」の実施や「緑の募金公募事業」の案件受付事業を通して、NGO の方々の申請書を拝見する機会があります。様々な地域で、現地の事情に即し工夫しながら活動されている事例を拝見するにつけ、その努力に頭が下がります。

ところで、毎年申請書を拝見して常々思うことがあります。申請書の書きぶりや提出資料が採否に大きな影響を与えているのではないかという懸念です。（同じ内容の事業だとしても）

審査を行う人って？

（ちょっと裏話ですが）案件は通常、非利害関係者により構成さ

れた委員会により審査が行われ採否が決定されます。委員会用の資料は事務局が作成して各案件を説明し、必要に応じて質疑に対する応答を行うのが一般的だと思います。そのため、申請書は、事務局が説明し易いよう情報が整理されていることが重要です。

募集要領のチェック！

必要な書類が全て揃っていること、全項目に必要な情報の記載があること、指定文字数で文章が作成されていることは、最低限必要な事項ですが、それらが満たされていない申請書が多々見受けられます。審査方法にもよりますが、これらはその時点でマイナスポイントを付けられる可能性があります。募集要領を慎重にチェックすることが肝要です。

熱意を簡潔明瞭に！

熱意が先走ってなのか、事業内容を延々と説明している申請書も見られます。これらは事務局が内

容を要約しなければならず、心証を悪くするのみならず、要約が重要なポイントを外す危険性も孕んでいます。逆に、事業の目的等を一行のみで書かれている申請書も見受けられます。これですと、簡潔すぎて行間をよむ隙間もありません。添付資料や団体の公開資料等で情報を補うにしても、申請者が本来意図した内容を事務局が委員に伝えられるとは限りません。必要な情報を満たし、かつ、簡潔・明瞭というのが理想的な姿です。そのポイントについては次号で詳しく説明させていただきます。

事業内容は適切に！

また、事業内容に団体としての主体性が確保されているか、必要な投入（資機材等）が事業内容にしっかりと位置づけられているか、スケジュールや実施規模、経費積算と相互に矛盾していないかチェックするのも重要なことです。それでは、次号でお会いしましょう。（文責：飯田）



今回のポイント！

- ✓ 募集要領をよく読む！
- ✓ 記載内容は簡潔明瞭に！
- ✓ 実現性の高い事業設計を！



7月6日～11日



JICA受入研修(国家森林モニタリング)の一環で、東京大学北海道演習林にて実習。伐倒によるバイオマス調査方法等を学びました。

9月6日～13日



新規事業「森林減少等要因影響分析調査事業」のため、インドネシア中部カリマンタン州で実施中の REDD+事業の調査を行い、地域住民の生計活動について調べました。

S M T W T F S

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29
30	31				

				1	2
3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	

	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

6月13日～17日



早稲田大と(株)ブリヂストンの連携研究プロジェクト W-BRIDGE で長年当センターと協力関係のインドネシアのランブ・マンラット大学の先生方が来日。京都日吉町森林組合等を見学しました。

8月8日



6月から約2ヶ月に渡る JICA「国家森林モニタリング」研修もついに修了式。午前中には研修の成果を基に自国の森林モニタリングの計画を発表しました。

9月22日～27日



当センターの仲摩がドイツで国連気候変動枠組条約の審査に参加しました。これは京都議定書に基づく各国のCO2排出量報告書が適切か確認するものです。

基金へのご寄付



熱帯林造成に役立ててほしいと、次のご寄付をいただきました。

◆(一財)ベターリビング様より
200万円

◆リンベル(株)を通じて多数の皆様より9万8744円

◆(一社)エコステージ協会様より
10万5000円

◆蛇川政彦様より4万円

◆エコポイント事務局を通じて多数の皆様より2384円

ご協力ありがとうございます。

皆さんの秋は何の秋ですか？ JIFPRO はしょく・・・
イベント盛りだくさんの秋です！ぜひご参加ください！
詳細は下記リンクからご確認ください。

10/31 [REDD+ セーフガード国際ワークショップ](#)

12/12-22 [国際森林・林業協力人材育成研修](#)
(インドネシア) 10/31 締切です



Editor's voice



電子版の利点を活かし、今号はカラー写真を多く掲載しました。現場の雰囲気がより伝わる紙面になったのではないかと思います。

表紙の写真選びは、編集作業のなかでも最も楽しい作業のひとつです。今回の表紙は、9月のインドネシア出張で出会ったゴム農園のおじさんです。個人的には、農家や漁師など自然を相手に生計を立てている方は、日々の経験と判断が生活に密接に結びついているからか哲学的な顔をしている方が多いように思います。このおじさんの顔もそのような雰囲気が漂っていて、お気に入りの1枚です。

ちなみに、私の食欲の秋は「チキン南蛮」です。いつか、本場の宮崎・延岡で食べたいと思っています。



「緑の地球」は今回がリニューアル第2号ですが、完全に電子版化するのとは今回が初めてということになります。

今回は植林 NGO の奮闘ぶりをお伝えするコーナーや、ミャンマーへの植林ツアーのレポートなど新たな記事も加えた盛りだくさんの内容でお送り出来たのではないのでしょうか。お楽しみいただければ幸いです。

私の場合は食欲の秋ということで、駅ビルのレストランがこの時期恒例で行う「メガ盛り」イベントを楽しみにしていたのですが・・・今年は準備不足で参戦することが出来ませんでした。残念無念。来年はカーボローディングして体調を整えて臨みたいと思います。



写真は、インドネシア・中部カリマンタン州のとあるゴム農家の男性です。この地域は泥炭湿地で、あまり農業に適した土壌ではありません。そのため焼畑移動耕作による陸稲の栽培が古くから行われてきましたが、近年ではゴムなどの換金作物に転換する人が増えつつあります。REDD+ など森林保全と生計向上の両立が世界中で検討されていますが、独学で始めたというこの男性の、丹精されたゴム農園を見てると、そのヒントが得られた気がしました。(写真：棚橋 雄平)



緑の地球

緑の地球 通巻 109 号 第 24 巻第 3 号 (年 3 回発行)

ISSN 0917-821 X

平成 26 年 9 月 30 日発行

編集・発行 / 公益財団法人 国際緑化推進センター

〒112-0004 東京都文京区後楽 1-7-12 林友ビル

電話：03-5689-3450

/ FAX：03-5689-3360

E-mail：jifpro@jifpro.or.jp

/ URL：http://www.jifpro.or.jp